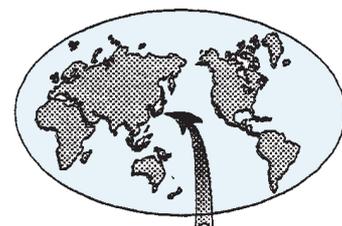


# 近畿地区会議ニュース



No. 28 ◆ March 2019

Kinki District Branch

## 平成 30 年度 日本学術会議 近畿地区会議の活動について

近畿地区会議代表幹事

第 1 部会員 伊藤 公雄

(京都産業大学現代社会学部  
客員教授)

日本学術会議近畿地区会議の平成 30 年度の活動についてお知らせします。本年度は、毎年開催してきた学術講演会とともに、今期から開始されることになった「地方学術会議」の第 1 回の開催にも、近畿地区会議を軸に取り組みが行われました。

学術講演会は、苧阪直行京都大学名誉教授を中心に企画されました。「社会脳から心を探る - 自己と他者をつなぐ社会適応の脳内メカニズム -」と題して、10 月 20 日（土）に、京都大学国際科学イノベーション棟のシンポジウムホールで開催され、約 170 名の参加で、講演と討論が熱心に展開されました。「社会脳」というまだ聞きなれない領域が、実際の私たちの生活にとって大きな意味をもつ学術分野であることが、講演を通して共有されたのではないかと考えています。学術講演会の内容については、本号の学術講演会報告を見ていただければ幸いです。挨拶をお願いした三成美保日本学術会議副会長・奈良女子大学副学長、講演を行っていただいた菊知充金沢大学子どものこころの発達研究センター教授、大平英樹名古屋大学大学院情報学研究科教授、高橋英彦京都大学大学院医学研究科准教授、全体討論のコーディネータをお願いした松井三枝金沢大学国際基幹教育院教授、さらに講演とともに全体の企画を担っていただいた苧阪直行先生に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

本年度から日本学術会議では、新たな取り組みとして「地方学術会議」が行われることになりました。「地方学術会議」とは、「日本学術会議がこれまで進めてきた地方における取組の強化を図ることで、地方創生へのより一層の貢献を図る。具体的には、科学者のみならず地域のリーダー等

を巻き込んだ意見交換を通じて地域の課題の解決に貢献することや、様々な地域において若い世代の科学に対する興味・関心を喚起する等の企画を実施する」（「地方学術会議の開催について」、平成30年1月25日、日本学術会議第259回幹事会決定）というものです。この新しい取り組みに、各地区からの提案が出され、幹事会の場で近畿地区の提案が承認されることで、京都での開催が決定されました。初めての「地方学術会議」ということでしたが、多くの方のご協力により、何とか開催にこぎつけることができました。正式名称は「日本学術会議 in 京都」となり、「伝統文化と科学・学術の新たな出会い」を総合タイトルとして、12月22日（土）、京都府立京都学・歴彩館と京都府立大学を会場に開催されることになりました。歴彩館大ホールで開催された第一部シンポジウムでは、小山田耕二京都大学教授の総合司会のもと、山極寿一日本学術会議会長、実行委員長の山田啓二京都産業大学教授（前京都府知事）の挨拶に続き、山極会長と土佐尚子京都大学大学院総合生存学館特定教授の対談「伝統芸術と科学」が行われました。「見えないものを見せるのが芸術」と語る山極会長と、動物やスポーツ選手の声を、デジタル技術で流動的にヴィジュアル化し表現する土佐教授の映像美は、テーマにぴったりの対談となりました。続く、中津良平京都大学デザイン学リーディング大学院特命教授の講演「アジア化する世界」では、現在のAIの時代、情報環境の変化が人間の感性を変えつつあること、そこに論理的思考を軸にする西洋社会とは異なるアジアの知の可能性のあることを、わかりやすく説明されました。第一部の最後は、渡辺美代子日本学術会議副会長と地元京都の華道家元池坊専好さんとの対談が行われました。女性として初めて家元を継承された専好さんは、「枯れた花にも華がある」と語り、単に効率や生産性にこだわらない世界との向き合い方に、話がはずみました。

京都府立大学での第二部では、「1. 京都市民にとっての科学・学術」「2. 伝統文化と科学・技術・リベラルアーツ」「3. 先端産業と科学・学術」「4. 若手研究者は科学・学術について何を考えているのか」の4つの分科会が開催されました。分科会1では、坂東昌子 NPO 法人知的人材ネットワーク・あいんしゅたいん理事長の司会で、佐藤文隆京都大学名誉教授から中学生の天羽悠月さんまで、世代を超えた議論が活発に行われました。分科会2では、佐藤洋一郎京都府立大学教授のコーディネートで、京都の和菓子について、その歴史と技術をめぐって、講演とともに和菓子職人さんの実演も行われ、その技の見事さに多くの参加者は驚きの声をあげていました。分科会3では、京都高度技術研究所理事長の西本清一京都大学名誉教授を軸に、地元の産業界のリーダーと研究者の間で、伝統文化があふれる京都で、明治維新以後いち早く新たな科学技術を取り入れた精神が、いまだ息づいている京都の特徴について議論が進みました。また若手アカデミーのメンバーを中心に組織された分科会4では、新福洋子若手アカデミー副代表を中心に、若手研究者と参加者の間で熱心な議論がもたれました。

宮野公樹京都大学学際融合教育研究推進センター准教授の企画で進められた第三部「あなたの得意は誰かの不得意。GIVE & TAKE でさくっと協働（コラボ）」では、公募による研究者や産業界からの「私の関心」「今困っていること」「提供できる知識や技術」のマッチングが、ポスター展示を通じて行われました。約100件のメッセージを前に、参加者同士の会話もはずみ、狙い通りの「協働」の機会となったと思います。

今回の会議の準備は、伊藤公雄を委員長に、企画提案者の小山田耕二京大教授、近畿地区会議運営協議会委員の高山佳奈子京大教授、さらに若手の研究者、京都の行政や産業界に詳しい研究者、さらに市民団体の主催者等10人ほどのメンバーで組織された企画委員会を軸に進められました。企画委員会のなかで、思わぬアイデアが生まれ、それがメンバーのもっている多様なネットワークとつなが

ることで、さまざまな分野から多くの方に参加していただくことができたと思います。

「日本学術会議 in 京都」では、共催団体の京都産業大学、京都大学、京都府立大学を含めて、地方自治体、大学コンソーシアム、地元の経済団体等、多くの協力を得ました。なかでも、事務局として学術講演会とともに、日本学術会議 in 京都の事務を一手に担っていただいた京都産業大学学長室のみなさんの力がなければ、スムーズな実施・運営をすることはできなかつたのではないかと思います。この場を借りて、協力していただいた皆さまに心より感謝したいと思います。



10/20（土）学術講演会 全体討論の様子  
（左から松井教授，苧阪教授，菊知教授，大平教授，高橋准教授）



12/22（土）多くの参加者で賑わった日本学術会議in京都

## 平成30年 日本学術会議近畿地区会議学術講演会

## 「社会脳から心を探る

—自己と他者をつなぐ社会適応の脳内メカニズム—

## 実施概要

日 時：平成30年10月20日（土）13時00分～17時00分  
 会 場：京都大学国際科学イノベーション棟シンポジウムホール  
 主 催：日本学術会議近畿地区会議，日本学術会議心理学・教育学委員会「脳と意識」分科会，京都大学，京都産業大学  
 後 援：公益財団法人 日本学術協力財団

## プログラム

## 開会の挨拶

伊藤 公雄 日本学術会議第一部会員・日本学術会議近畿地区会議代表幹事・  
京都産業大学現代社会学部教授  
 三成 美保 日本学術会議副会長・日本学術会議第一部会員・奈良女子大学副学長

## 趣旨説明

荻阪 直行 日本学術会議連携会員・京都大学名誉教授・大阪大学脳情報通信融合研究センター招聘教授

## 講演1

「自己と他者をつなぐ社会脳」

荻阪 直行

## 講演2

「社会脳から見た発達障がい」

菊知 充 金沢大学子どもこころの発達研究センター教授

## 講演3

「社会脳から見た公正」

大平 英樹 日本学術会議連携会員・名古屋大学大学院情報学研究科教授

## 講演4

「社会脳から見たギャンブル」

高橋 英彦 京都大学大学院医学研究科准教授

## 全体討論

「社会脳研究を社会に生かすにはどうすればよいか」

コーディネータ：松井 三枝 日本学術会議第一部会員・金沢大学国際基幹教育院教授

## 閉会の挨拶

荻阪 直行

## 総合司会

伊藤 公雄

講演の概要

社会脳とは、自己と他者、そして社会を結ぶ脳の働きをさします。私たちは社会脳によって他者の心を想像することで、豊かな社会性を育んできました。仲間との協調的な社会生活を営む人間にとって、社会適応を担う脳の働きは重要です。

しかし、その仕組みの一部がうまく働かなくなると、依存症、発達障がい、引きこもりやうつなど心の社会不適応が生まれます。社会脳の研究は始まったばかりですが、不適応の原因を探り、近未来を適応的で創造的な超スマート社会に変えるデザインを提供します。

本講演会では、心理学、脳科学と情報学が融合して切り拓いてきた最先端の社会脳のサイエンスから、社会性の脳内メカニズムを4人の方々にご専門の立場からご講演を頂きました。また、その後の全体討論では活発な議論が行われました。

以下に講演の演題と要旨を示します。

〔文責：伊藤 公雄〕



講演1 「自己と他者をつなぐ社会脳」

荻阪 直行 日本学術会議連携会員・京都大学名誉教授・大阪大学脳情報通信融合研究センター招聘教授

古代ギリシャの哲学者は、自己が他者と結ばれた社会的存在だと気づくことの重要性を指摘しましたが、この自己と他者をつなぐのが「社会脳」です。

近年、脳の生物学的仕組みの解明は、進展しましたが、脳の社会的な働きやその仕組みの解明は遅れています。しかし、最近、社会脳という新しい学際領域が拓かれて、豊かな社会性を育むデフォルトモードの脳の仕組みの解明が始まりました。数学の問題を計算規則によって解くのが認知脳だとすると、他者の心を想像することで問題を解くのが社会脳です。同時に社会脳は自己に気づく脳の仕組みをもつことで、自己と他者をつなぎます。共感、利他的行動や災害などのストレスに立ち向かう心の回復力なども、自己と他者を結ぶ心の働きから生まれます。インターネットも自己と他者をつなぎますが、同時に依存症やいじめなどの社会的な不適応も生みだします。近未来の新たな社会の創出に向けて、自他のかかわりを社会脳から考えました。

講演2 「社会脳から見た発達障がい」

菊知 充 金沢大学子どもこころの発達研究センター教授

自閉スペクトラム症 (ASD) は幼児期より症状は明らかになり、その症状はとても多様です。現在、診断は症状により決定されます。しかし、背景となる生物学的基盤は多様であると考えら

れています。我々は、幼児期の脳を直接測定し、客観的な指標を確立する事が必要であると感じています。病態メカニズムに即した分類により、今後の治療戦略や介入研究の効率化をはかると考えております。

金沢大学には国内唯一の装置として、非侵襲的に脳機能を測定できる幼児用脳磁図計が設置されています。このシステムが可能にしたことは、幼児期の、覚醒状態で、不安を伴わない、放射線被ばくのない脳研究です。従来のASD者の脳機能研究においては、幼児は検査中にじっとしていることが困難なこともあり、主に成人期が対象でした。この幼児用MEGにより、幼児期からのASD脳機能研究が容易になってきました。ここから見えてきた、社会性に関わる脳の特徴を紹介しました。

### 講演3 「社会脳から見た公正」

大平 英樹 日本学術会議連携会員・名古屋大学大学院情報学研究科教授

ヒトは他の動物に比べて極めて協力的であり、資源や責任などを公正に分配しようとする規範性を有しています。その一方、戦争やテロリズムに象徴される強い暴力性や、他者を犠牲にしても利益を得ようとする利己性をも有しています。さらに、自己が所属する集団へは好意を持ち寛容に振る舞う一方、ヘイト・スピーチに見られるように外の集団に対して敵意を示すこともしばしばあります。社会脳研究では、経済学で発展した交渉ゲームと呼ばれる実験課題を用い、行動、脳活動、生理的反応などを測定することによって、こうしたヒトの社会的行動を実証的に探究してきました。

ここでは、協力や公正の規範に関連する脳の機能について紹介し、ヒトにおいて協力や公正がどのように進化してきたのかを考察しました。さらに、協力や公正の規範を逸脱し他者を搾取するサイコパシーと呼ばれる性格に関する知見に基づいて、ヒトという存在について考えました。

### 講演4 「社会脳から見たギャンブル」

高橋 英彦 京都大学大学院医学研究科准教授

人間が社会的存在である以上、脳科学の究極の目的が人間の理解だとすれば、脳科学は程度の差はあれ、すべて広義には社会脳研究とも言えます。ましてや、精神・神経疾患は、定義上、社会生活に支障をきたす状態であるため、精神疾患の脳科学研究は、それ自体が社会脳研究であるともいえます。とはいえ、社会的行動の神経基盤を理解しようとする狭義の社会脳研究として急速に興隆してきたのには、非侵襲的脳情報の計測技術や認知・心理パラダイムの進歩により、情動、意思決定、意識といった心理学、経済学、哲学などの人文社会の学問で扱ってきた領域が、脳科学と融合してきた背景があります。

精神疾患で認められる行動異常の背景には意思決定の障害が程度の差はあれ、概ね認められます。そのため、最近では意思決定というテーマで脳画像と経済学や心理学を融合した学際的な取り組みを通して、精神疾患なかでもギャンブル依存の研究を進めてきたので、その成果の一端を紹介しました。

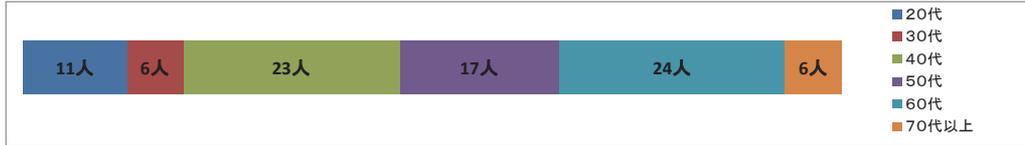
平成30年日本学術会議近畿地区会議学術講演会

「社会脳から心を探る--自己と他者をつなぐ社会適応の脳内メカニズム--」

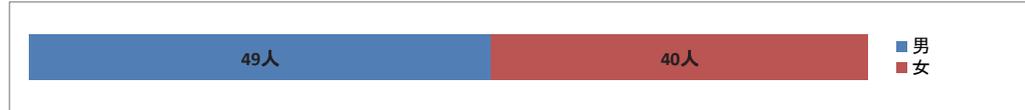
アンケート集計表

【講演会参加:約170名 回答:89名】

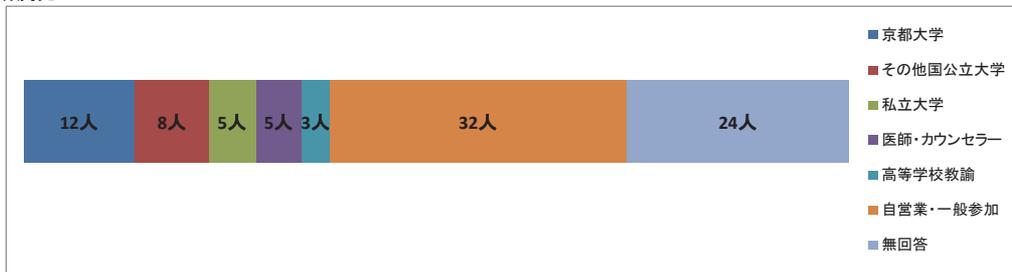
1. 年齢



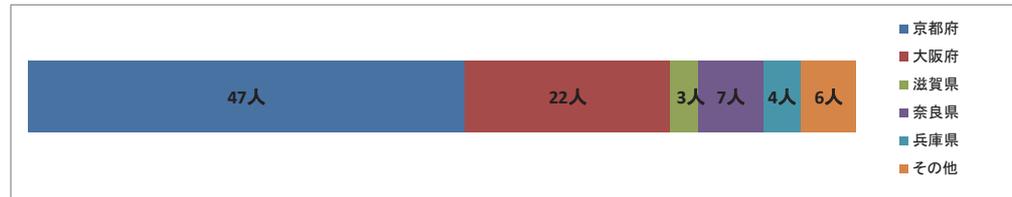
2. 性別



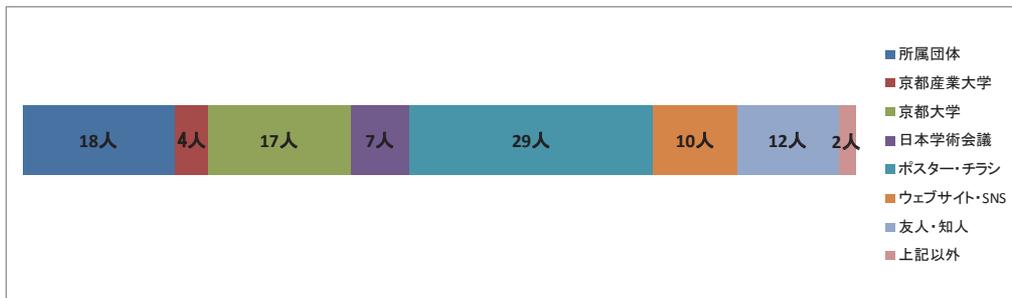
3. 所属先



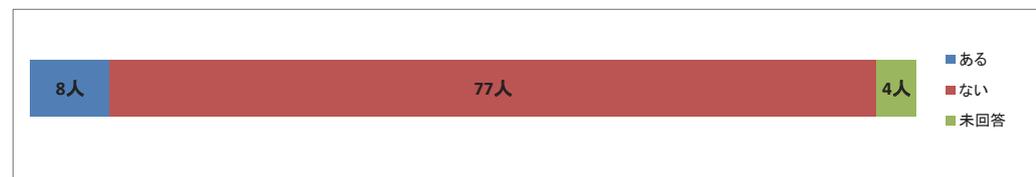
4. お住まい



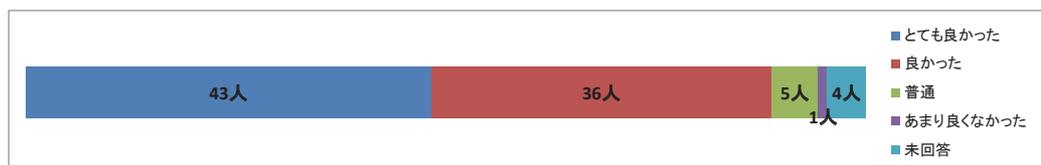
5. この講演会を何によってお知りになりましたか。(複数回答可)



6. 今までに日本学術会議近畿地区会議の学術講演会に参加したことがありますか。



7. この講演会の内容についてどのように思いましたか。



**\*\*\* 日本学術会議近畿地区会議とは \*\*\***

日本学術会議は、科学が文化国家の基礎であるという確信の下、行政、産業及び国民生活に科学を反映、浸透させることを目的として、昭和 24 年（1949 年）1 月、内閣総理大臣の所轄の下、政府から独立して職務を行う「特別の機関」として設立されました。

職務は、以下の 2 つです。

1. 科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること。
2. 科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させること。

日本学術会議は、我が国の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の全分野の約 87 万人の科学者を内外に代表する機関であり、210 人の会員と約 2000 人の連携会員によって職務が担われています。

日本学術会議の役割は、主に（Ⅰ）政府に対する政策提言、（Ⅱ）国際的な活動、（Ⅲ）科学者間ネットワークの構築、（Ⅳ）科学の役割についての世論啓発です。

日本学術会議には、地域の科学者と意思疎通を図るとともに学術の振興に寄与することを目的として、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄の 7 つの地域に地区会議が置かれています。これらの地区会議は、地域の求める情報に即したテーマを設定した学術講演会の開催や科学者との懇談会、地区会議ニュースの発行などを行っています。

地区会議運営協議会は、当該地区に居住する会員又は勤務地を有する会員の中から各部ごとに選出された会員で構成されており、現在、近畿地区会議においては、第 1 部会員の伊藤公雄（京都産業大学現代社会学部 客員教授）が代表幹事を務めています。

※「日本学術会議地区会議運営要綱」は以下のリンク先よりご覧ください（PDF 形式）。

<http://www.scj.go.jp/ja/scj/kisoku/15.pdf>

近畿地区会議運営協議会

|      |         |         |
|------|---------|---------|
| 代表幹事 | 伊藤 公 雄  | （第 1 部） |
|      | 窪 田 幸 子 | （第 1 部） |
|      | 小 林 傳 司 | （第 1 部） |
|      | 高 山 佳奈子 | （第 1 部） |
|      | 片 田 範 子 | （第 2 部） |
|      | 光 富 徹 哉 | （第 2 部） |
|      | 小山田 耕 二 | （第 3 部） |
|      | 萩 田 紀 博 | （第 3 部） |
|      | 宮 地 充 子 | （第 3 部） |

近畿地区会議事務局

〒603-8555  
 京都市北区上賀茂本山  
 京都産業大学 学長室（戦略企画担当）  
**TEL:** 075-705-2953  
**FAX:** 075-705-1960  
 メールアドレス

日本学術会議ホームページ

<http://www.scj.go.jp/index.html>